

# まつかぜ

平和学園小学校  
同窓会連絡誌

〒ヶ崎市富士見町5-2  
電話 0467 (82) 0093

同窓生の皆様、今年は何年にもない暑い夏でしたが、秋風の立つ現在、それぞれの職場にまたご家庭に、学業にとお励みのことと思えます。

「まつかぜ」を通して四回のごあいさつが出来ますことを嬉しく思います。  
小学校も先生方と力を合わせ、平和学園本来の姿に近づいて参りました。現在、小学校専任の先生は一人増して十一名、児童数一一〇名です。特に嬉しいのは四年生の一年入学時七名でしたが、二名転校して五名となりどうなることかと心配しましたが、その後転入生が続き、現在十名、生き生きとしたクラスとなっています。こうした少人数のクラスへ転入させて下さるご両

親の気持を考えると感謝でいっぱいですが、同窓生の皆様始めご両親によって培っていただいた、平和学園の家庭的な校風によるものと思えます。

東京、埼玉、滋賀、石川から十七校二五〇名の先生方が本校を会場に、「明日を創るキリスト教学校の展望と実践」をテーマに研修会が行われました。職員はその準備に大変でしたが、お陰様で学校の内外を整備していただき諸施設が充実いたしました。  
運動場のスプリンクラー、サッカーゴール、バスケットゴール、防球ネット、運多の協力によって充実していたいただきました。当日は短時間でしたが、児童の特活金管打楽器とリコーダークラブの発表を聞いていただき好評を博しました。PTAお母様方の心のこもったおもてなしもあり、多くの先生方に平和学園のよさを知っていただき お帰りいただきました。  
今年も9月から10月にかけて運動会、学芸会、バザ

## キリスト教小学校の先生方をお迎えして

小学校長 笠野 欣 二

今年小学校にとって「第30回キリスト教学校教育同盟小学校職員協議会」の会場校を分担するという大行事が6月22日(土)にありました。この会はプロテスタントのキリスト教学校が組織している会で、神奈川、  
出場出口に雨除けひさしや下駄箱、職員作業で松林斜面を利用して造ったアスレチック、校舎の内装、床の張替、新しい小学校標札、標示板、校舎内不良箇所の小修理等いろいろと学園の予算と共に、PTAからも  
1があります。皆様も是非ご来校下さい。また児童募集に対しても、平和学園をご紹介、おすすめの協力をよろしくお願い申し上げます。(キリスト教小学校の先生方をお迎えして第30回全国教職員協議会終

### 小学校の近況 1

#### リコーダークラブ がんばる。

特活も相変わらずやっていますが、近頃めきめきと腕を上げているのがリコーダークラブです。増淵先生の指導で、この春休み県民ホールでの、神奈川県学生音楽コンクールに出場し、参加百四十三団体から選ばれた七校のうちに入り、私立小学校協会賞というのをもらってきました。

リコーダーは、ふつうの学校では三年生からやりますが、平和では一年生からピアノではなく、リコーダーをやらせています。一年生の後半から二年生のはじめくらいでアンサンブルができるようになります。今年で三年目ですが、その成果が現れてきたのでしよう。これからの成長が期待できます。

# 「日本の水」

S 25年卒 大石茂生

今年も又、雨の少ない暑い夏でした。

水処理を仕事とする私にとっては気になる現象です。周囲を海に囲まれ、その中央を山脈が走る我国の地形は、少し大量に雨が降れば洪水を引き起こし、逆に雨が降らねばすぐに水甕が底をつき、給水制限といった降雨の影響が大です。それなのに、過去には五木の子守歌に唱われる「水は天からもらい水」とか、只同然のことを「湯水の如く使う」などといった言葉がよく使われました。しかし、昨今ではそうはいかなくなってきたのです。地盤沈下を防止するために、地下水の吸上げ利用は制限され、その代わり水道の水を使うよう指導を受けながらも、そのコストは大幅に値上りし、将来も更に上昇する見込みと聞きます。

水—それは人類にとって貴重な資源のひとつです。今日まで私たちは世界で最も水に恵まれた国土に暮してきました。

いま改めて水の存在を考へるとき、そこには巨大な自然の再生システムが働いているのに気付きます。降った雨は、地下にしみ込んで砂や土でろ過されたり、一部は河や海に流れ、蒸発して水蒸気となり天に昇り雲となって再び雨となり地上へ戻ってくる。この浄化作用を繰り返し、それによって自然界のバランスが保たれているといわれます。しかし、今日ではわが国も都市化や工業化の進展につれて大都市とその周辺では、いつも水不足に悩まされるようになりました。とても自然の再生システムを待っていたのでは間に合わ

なくなってきたのです。

そこで、水を有効に利用する技術をもって、失なわれかけているリサイクルのバランスを回復するためのお手伝いをする目的で、十一年前に会社を設立し、今日に至っています。

今後、文明社会が進歩するにつれて、きれいな水に対する要望はますます増大することでしょう。

ご存知でしょうが、水道の蛇口から出る水を直接飲む国は日本を含むわずかの国だけです。東南アジアは勿論のこと、アメリカやヨーロッパでも水道の水は決して飲みません。もし、飲むと下痢や腹痛を引き起こすためです。それから、もう少し専門的な話をすると、水には大別して、上水、中水、下水の区別があります。上水は飲料(場合によって多少の処理が必要)用、中水は飲料以外の車を洗ったり、道路に水をまいたり、冷房用の水などとして使い、汚れて排水するのが下水で

す。わが国でも近年ようやうにこれらの区別がされるようになり、同時にそれらの用途により、使いわけるといふ知恵が働かされるようになってきました。ダムや貯水池に降った水を浄化してパイプを経由して、長距離を輸送するコストを考へて下さい。1トン(1m<sup>3</sup>)の水が東京では現在約三五〇円です。まだ安過ぎると聞きました。地域により違うようですが、近い将来の値上げは避けられないことでしょう。

これを機会に、もう一度水について考え直してみして下さい。そして、単に節水をするだけでなく、もっと水を有効に生かして使うことを考えたいものです。

私は今、「水に学び」—「水を考え」—そして、水を活かすことを仕事として明日に向かって挑戦していきます。

## 小学校の近況 2

先生方手作りのアスレチック

三四年前台風があつて、自転車置場の所のアカシヤの大木が何本も倒れたのをおぼえていますか、あの太い幹を小学校へ運ばせられたのをおぼえている人もあると思います。

あれが何かに使えないかなあと、見るたび考えていたんですが、二年前高校の校舎を建てた時、電信柱の古材が四五本出たんです。それとアカシヤ材で、この五月キリスト教小学校の研修大会の準備の時、先生方みんながアスレチックを作りました。

場所は小学校講堂南側の松林の中、スロープを利用して面白いのができました。荒けずりの自然の木材の感じがとてもよく、子供たちにも好評のようです。見に来て下さい。

## 「あれから三十年」

S 30年卒 乾 桂 二

平和学園小学校を卒業して早三十年の月日が過ぎてしまった。ついこの間まで泣かされてばかりいたと思つたのに、気がつくとも「長い友だち」が一本一本去って行き、「頭皮が見える」と気にする年頃になってしまった。しかし「これからが男盛り、働き盛りなのだ」と自分にいい聞かせて、この暑かった夏を一層熱く戦わねばならなかったのである。というのも、この十一月に月刊誌を創刊することになったからである。六月にフランスの出版社との契約が成立して、「コワフェール・ド・パリ」というヘアースタイルのファッション雑誌の日本版を出すわけである。ファッションに興味のある人ならば、お染馴みの「ポートル・ポートル」の姉妹版で、八十余年の

かのような態度なのである。田中先生は元々外交官であつたが、思うところあつて外務省を辞められ、司法試験を受け直して弁護士になられたという事からも、その実力は察しがつくところである。そのように優れた能力を持っている人は、何も偉ぶる必要がないといえはそうかも知れない。しかし、我々に親切にして下さる時にも決して負担にならないようにとの配慮があるような気がするが、それが自然であることが又すごいと思う。「情けは人の為ならず」ではないのである。平和の卒業生の端くれであるからして、私も色々と「せっかい」をしてきたが、反省することしきりである。

出る事すら難しい状態であつたが、幸い兄がペイルトにいたので呼び寄せてもらう形で、ペイルトまで飛んだのである。ペイルト滞在は七ヶ月であつたが、日本大使館におられた外交官の山志田さんという方は、兄弟で一方ならぬお世話になつたのだが、その山志田さんのご令嬢と結婚されたのが若き外交官の田中先生だったのである。

田中先生のおかげでフランスとの契約が出来たのは良かったが、厚さが1cmもあるような雑誌を毎月出さねばならないということは、そう簡単ではない。フランスから来るのはたつたの三十頁分しかないのである。その上私は編集の経験はないし、第一紙とペンだけを相手に三日間も暮したら気が狂ってしまうかも知れない。ところが不思議にも、多分日本中を探してもこれ以上の人材はないと思われる人が飛び込んで来た。その人はつい五月までヘアー

ファッション誌の編集長をしていた人で、業界では、その能力も認められており、人望も厚いのである。勿論私もよく知っていたのであるが、こんな人がよく前の出版社を辞めたかとも思うし、又会社の方もよく手離したとも思うが、本人に聞いてみると、何年も前から辞める意志は固かつたという。彼を筆頭に必要な人材がほぼ揃つてしまつた運の良さに、我ながら喜んで

スタッフが揃うと、今度は公告取りである。公告も単に業界のものだけを取るというのならまだしも、ファッション雑誌だからという事で、イメージの合わない物はいただかないことにした。又ナショナルブランドの中から、ファッションブレイな広告のみを、オールカラーで十社位集めようというのだから、かなりズウズウしい考えだと思つて、私の「熱」戦は秋にも続くのである。

## 仕事・家庭・ふれあい

S 35卒 藤岡 直邦

自分の一生という物差で人類とか地球の歴史とかを考えると、気の遠くなるような年月とか時間とかが存在しますが、一方地球という一つの星の一生から、自分の一生をみた場合、それは一つの瞬間でしかない。現に楽しかった平和学園を卒業してから早くも二十六年余の年月があったという間に過ぎてしまった。多分この先の二十六年余の年月も同じであろう。そしてその時自分はすでに六十四才にもなってしまったのである。地球の歴史からみれば、このように短い人生をいかに過ごすかを考えることは大切なことなのである。このことは大した人生経験も学識もない私にとって難問だが、この機会に私なりに考えてみることにしました。私の望む自分の一生とは「悔いのない人生」です。

死んでゆく際に悔いを残すような人生は送りたくない。

そのためには一生懸命努力することが大切でしょう。努力した後の結果はあまり重要でないと思います。「こじき」として終わろうが、「資産家」として終わろうが、死ぬ時には、どっちみち終わりのだから大差がないであろう。一生懸命努力した結果であれば、悔いは残らないと信じます。では何に一生懸命努力すれば良いのだろうか、自分としては、仕事・家庭・人とのふれあい、に関し、真剣に生きる努力をすることのよう

に思います。大学生の頃、親戚の叔父に就職に関し、きかれて「バンドマンになろうかな」と言われて叱られたことがあります。医者

の叔父が曰く、「男の仕事とは後世の人になんらかの役に立つものを残すことだ」と教えられました。今の損害保険代理店という仕事に、そのような目標をもち努力したい

と思います。

「家庭とは、夫婦で一本のロウソクに火をともしようなものである」という諺がありますが、ほっておけばやがてそのロウソクの火は消えて真暗になってしまいます。消えてしまう前に二人で新しいロウソクに火をともし、家庭とはそのくり返しを夫婦で努力してゆくことだそうです。

「人生とは、限られた時間にかに多くの人々と、スバライふれあいを持つるかということだ」と言った人がおりますが、今ふり返ると、平和学園にて「人とのふれあい」について教えられたと思ひ感謝いたします。

## 夏の終わりに

S 40卒 国松真知子

先日、九十二才になられた葛生先生を囲んでの会を開きましようという案が出てここに、改めて月日の流れの速さを感じ、その頃の数々の思い出が、一気に甦ってきました。

松林を渡る潮風。サラサラとした砂の山や坂。毎朝行われる講堂での礼拝。挨拶を交わす自転車置き場。そして、あの顔、この顔。なつかしい風景が重なります。

葛生先生には、一年生の時受持っていただきました。まだまだ世話のかかる子供達だったことでしょう。二年生、三年生は、高垣先生。学芸会では「七ひきの子やぎ」を公演しました。四年生は日井先生。御殿場での林海学校も、楽しい夏の思い出です。水の冷たさとれんげの野原と、富士山の大きく美しい姿が、目に浮び



ます。五年生・六年生は、

新任の中島先生。はりきり先生です。音楽がとても好きで、かなり難しい曲を、二部・三部合唱で歌っていました。

ハレルヤコーラス、アーメンコーラス、第九の「喜びのうた」。

お陰さまで、いつでもどこでも、すぐに歌をうたう楽しいクラスとなりました。音楽の斉藤先生も忘れられません。音楽の楽しさ、深さを、一層強く印象づけてくださいました。

そして、日曜日にも返上して、舞台装置を作りに出掛けたオペレッタ(音楽劇)「影をなくした男」「学生殿下」。一人で二役・三役もしました。衣裳を着たまま、ある場面ではピアノ伴奏者にも早替りしました。我等、総勢十六人。あっちにもこっちにも、大張りきりでした。あんなに、のびのびと豊かに育てられたのはいったい何だったのでしょうか。

自然の環境もさる事ながら、先生達の大きく私達を包んで下さるようなご指導。そして、先輩・後輩との密な交流。学年に散らばっているそれぞれの兄弟・姉妹。父兄の協力と理解。それに、通ってきている生徒の中に、外国の人もいて、国際的でしたし、又、体にハンディのある人、家族に恵まれていない人もいました。ほんとに色々な人が一緒に学んでいました。だからこそ自然に、家族的な雰囲気の中で、キリスト教の教えのもとに私達は、のびのびと心豊かに育ってきたのではないかと、思い返さずにはいられません。

小学校以来、私はピアノ、声学そしてオペラ演出と、音楽の道を進んできました。幸いなことに、一年半のイタリア留学の経験もする事ができました。再び母校（東京芸術大学）に戻り、オペラ科演出研究生としてはただ一人、はりきって通っています。

まだまだ日本のオペラ界は、問題を多くかかえています。

外来物のコピーがほとんどで、日本独自のオペラが数少ないこと。

地方にも、次々と建つ会館ホールですが、公演内容が貧しいこと。

オペラの舞台を支えるスタッフ（演出家、舞台監督、舞台美術家、衣裳、メイク、プロデューサー、マネージャー等）への認識と、養成機関がないに等しいこと。

これから、少しずつ改善していかなければならないでしょう。

私の力は、まだまだ弱いのですが、自己満足で終わることのない舞台。感動のある舞台。少なくとも「来て良かった」と思っていただけの舞台作りを目差して、今、遮二無二もがいています。

町角のポスターで、私の名前を見付けて下さった時には、是非コンサートへ足をお運び下さい。心から、

歓迎申し上げます。

### バイト・就職・結婚

S 50卒 内藤 公貴

八月のある日、僕は何年か振りに三人の同級生と会った。事の始まりは、同窓誌に僕達の近況を載せたいという横山先生からの電話だった。「はい、わかりました」と、あっさり返事はしたものの、はたと困った。

なにしろ近況といっても、僕は今イラストの勉強を続けていて、学生の延長のような生活だったし……。さっそく仲のいい高岡君に電話をした。「高岡、なんとかしてくれない?」、しかし、彼も、まだ大学生で留年の身とあっては、あまり乗り気でない。「何人か集まって話をすれば、なにかいい話も出るだろう」ということで、僕と高岡君、小田切君、中村さんの四人が集まった。実に同窓会というものを二度しかしていない僕達は、久しぶりに会うこと

になった。

僕は一年半程前からイラストレーションの修業中で、デザイン事務所でバイトしながら売り込みをしている。仲々難しいし、思った通りの仕事は出来ないけれど、がんばってやっている次第。高田君は、大学で音楽にのめり込み、ドラムをたたいて熱中するあまり、大学生活を長びかせる結果となった。ただし、彼のドラムの腕は大したもので、バイト

とはいいいながら、有名バンドのバックに入ってやりたっていた。小田切君は法学部の学生。今度就職だそうで、忙しい様子であった。彼は大学に入ってから、YMCAのボランティアを続けていて、年中小学生をキャンプに連れていっていると言っていた。人は見かけに寄らない(?)なんて言っは悪いかな。小田切君曰く「ただで旅行に行けると思ったらそんなもんじゃなくて、子守りにおわれちゃって大変だよ」、大学で

はサークルでテニスだそうで、結構楽しくやっているみたい。さて次は中村さん。彼女は、なんと今年の四月に結婚したのだそうだ。今は松森さんというそうで、いやあ、びっくりした。何しろ僕達男共は、同級生が結婚なんて現実になると「早い!」と思ってしまうけれど、女の子にしてみれば、もうそういう年頃なんだなあ、と妙に感心してしまっ

た。なんでも電撃結婚だったらしく、「結婚の一週間前までは思いもよらなかった」と言っているくらい。彼女の方からアタックして、とうとうつかまえたという話です。お幸せに。今度会う時には、かわいい赤ちゃんでも連れてくるのでしょうか。

六年間一緒に過ごした友達も、今はあまり会えないけれど、会えば昔のままで。でもそう思う反面、皆それぞれ、自分の道を見つけたつある。そんな年頃なんだとも思った。

近況を知らせることはならなかったかも知れないけれど、皆、これからの出発点にいるということ、それが僕達の近況なのだろう。それから最後に、これを讀んだ同級生の諸君、連絡下さい。たまには会って話でもしましょう。

それでは、お元気で。

「本当の空は酔っぱかった」

S 55卒 竹内 剛也

平和学園小学校に団体旅行はない。家族かグループ旅行という雰囲気だ。中でも修学旅行に厳しい規則などなかった。自由なものだった。その旅行途中どこかでイカを焼いて売っていた。それを買ったら、他の小学生が囲むようにして「そんなもの買っていいのか」「先生に言うぞ」と、からんできたこともあった。又、磐梯山を見た。今でもその時バスのガイドさんが教えてくれた野口英世の歌を覚えている。そして又バスは、

なんとカラインという山の上を走っていた。安多羅山が見えて、ガイドさんが智恵子抄の一節を教えてくれた。空は薄暗く曇っていた。

僕はアルバイトでスキー場に來ていた。ある晩のこと仕事が終わって、二つ三つ年上の人から提案があった(自分は十七だった)。ゲレンデを上がった所から見える谷をへだてた山にあるプリンスホテルへ行つて、コーヒーを洒落こもうと。

たしかに直線なら2kmもないだろう。さっそく他の若い衆を誘って行くことになった。ホテル街を離れるにつれ、あたりは真っ暗になってくる。もうホテルの光も屋根の裏に入つて届かない。その日は月がなかった。風もなかった。真っ白な闇があたりを覆っている。どこも同じ白で、進むべき道もわからず、雪のかげに当たると、方向を変えるくらいだ。ときたま、車が雪煙を上げて

通り過ぎてゆく。運転者はこんな連中が夜、雪の道を歩いているのをどう思ったことだろうか。一時間近く雪の中を歩いた。谷の向こうにホテルをながめるだけで、一向に谷を渡る道はなく、しまいにホテルを離れていってしまった。結局、一行はコーヒーを断念した。そして一つため息をついて空を見上げたとき、空に星の流れがあった。天の川だ。生まれて初めてだった。あれが天の川さ、と言われてもそんなものは見当らず、存在すら疑っていた。驚くほどの星数だった。空は星だらけだった。急に辺りが明るくなったような気がした。天の川はかすかに、又静かに流れていた。そのとき、そのときだった、本当の空はここに

あるんだろうと思つたのは、「本当の空か」と一言もらすと、一人から智恵子抄の中のいくつかが出てきた。中にレモン哀歌が入っていた。音は雪に溶

け、恐ろしく静かで、星のきらめく音さえ聞こえるようだった。「かなしく白くあかるい死の床」のイメージ。全員コーヒーのことは忘れていた。不幸にも天文の道に詳しい者はなく、皆おもしろい出し、おもしろい出し、あれは何座、こっちは何座、あれが何座、これが何と、指をさして歩いていた。ホテルの光が近づいてきた。ふり返ると山の向こうに青白い月が顔をのぞかせていた。月がもう少し高く上がった頃、谷向こうのホテルの見えるゲレンデを登った。皆、調理場から失敬してきたレモンを持っていた。月明かりで、木が雪の上に影を投じている。夜はすみわたり、地と空は静かににらみ合っている。

レモンは冷たく、酔っぱかった。

小学校の二年

五十九年度

一学期より

- 9・29 運動会
  - 10・27 学芸会・バザー
  - 11・5 読書週間
  - 12・1 陸上記録会
  - 12・17 クリスマス
  - 12・19 もちつき
  - 1・10 席書大会
  - 1・18 スケート教室
  - 2・19 五六年スキー教室
  - 3・5 マラソン大会
  - 3・18 卒業式、謝恩会
  - 六十年年度
  - 4・6 始業式
  - 4・29 プレイデー
  - 5・21 自然教室
  - 6・4 六年修学旅行
  - 6・22 キリスト教小学校
- 全国協議会



### 血の本質につながる 感慨

七月二十八日から八月十日までの丁度二週間、機会あって私は中国西域の旅につくことが出来た。

全行程は図の通り、北京―蘭州―酒泉―敦煌―吐魯藩―烏魯木齊と、いわゆる天山北路の旅であった。中国は日本民族、日本文化の源流、ヨーロッパの旅で味わった感慨とは全く別な、血の本質につながる感慨であった。

以下その旅の中で感じた感想を「中国西域わが旅の中で」と題し綴ってみた。

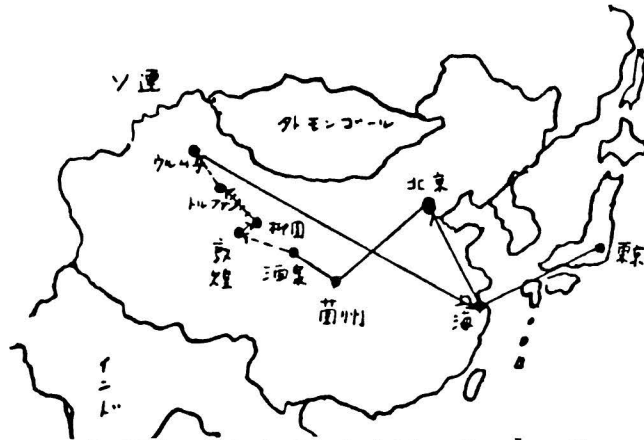
### 吐魯藩（トルファン） の人々の柔和さ

戦前派の私にとって忘れられない一人の思想家がいる。その名は和辻哲郎（いまこの方の墓所は鎌倉・東慶寺、別名哲学寺にある）。ところで、この方の著書を二つ挙げるとしたら、そ

の一つは「古寺巡礼」、いま一つは「風土」この二冊である。それほどこの書物は優れたものである。ことにその一冊「風土」は名著と言っている。この中で和辻哲郎は、文化はその風土から生まれると書いてある（私はこの初版本を今も大切に蔵書している）。

ところで今回の旅の中で最も印象強く感じたところは、新疆ウイグル自治区吐魯藩（トルファン）であった。

吐魯藩は北京から三五〇キロ奥地に入った中国西域の町。ここは天山々脈に囲まれたと



## 中国西域わが旅の中で

福島光夫

七十度を超えていたという。そのうえ年間降雨量はたったの十六ミリ、全くの乾燥地帯である。金盃パイの水が一晩で蒸発してしまつというから猛烈な乾燥風土。それでいて新疆ウイグル自治区・吐魯藩の人々の顔は殊のほか柔和であった。こんなにも自然の厳しい条件の中にあつて、この柔和さはどこからくるのであるうか、不思議に思ったのは私だけではない。ところがこの謎が解けたのは、次の二つによってであった。

一つはこの町の歴史の厚味。

二つはこの町を流れる生命の水。この二つであることを私は感じとった。

交河故城、高昌古城、アスタナ古墳、ベゼクリク、火焰山等々どの一つをとっても歴史がそのまま息づいている町である。

### はじめて漢詩を詠む

私はまず交河故城をたずねた。ここは東西を川にはさまれた文字通り交河の上に立つ丘陵地帯、南北一、五キロ、東西は広いところで三〇〇米、千五百年の歴史を持つ古城であった。私は炎熱の中に立って独りその風景を描きはじめた。すると、その静寂な風土の中から、その千年の昔、歓びの声を交わし合った古人の声、私の耳にさざ波の如くきこえてきた。

それと同時に口をついて出て来たのは、次の如き漢詩らしきものであった。

交河故城跡 炎熱の中にあり

草木絶えて無き処  
た だ黄土壘々たり  
栄古千年の昔を偲べば  
古人交歓の声さざ波の

底、一大盆地となつている。したがって夏は酷暑、冬は厳寒。私が訪れた八月五日の気温は四十五度。地熱は

吐魯藩は歴史の町である。しかも千年、千五百年の歴史が乾燥地のためそのままそこに実在する町である。

如く

これは私の詠んだはじめての漢詩六篇中の一つである。さて、前記した和辻哲郎がその著書「風土」の中に託している通り、まさに文化はその風土の中から生まれ出る所産。私をして漢詩らしきものを詠ましめた力、それはほかでもなく眼前に広がる吐魯蕃悠久の歴史である。と同時にそれがまたこの地の人々の柔和さの原因であることを私は知った。

千年の歴史を眼前に見て生活する人間と、われわれのように、一年は愚か一日一秒の時の刻みを気にしながら生きる都会現代人との間には、自ら人間性に差異の出で来るのは、悲しいことだがやむを得ない。  
さらに今一つ、吐魯蕃の人々の柔和さは、天山々脈の雪どけ水、生命の水を豊かに感謝して受け、満足して生活しているところに、あの微笑があるのだろうか。私は強く感じた。

### 1. 二世続々帰る

去年の松風で、卒業生の二世で入学転入した子供たちのことを紹介しました。今年また親三人子供四人が帰ってきました。三十八年卒の岩倉君と四十一年卒の杉沢さん夫婦と、三十四年卒の橋本枝画ちゃんです。岩倉君の子供は四年の男の子と三年の女の子、上の子は具威君といつて、親父そっくりのいたずらっ子です。

### 「創立者村島先生の夢 実現に一步前進」

しかし、さきに入っていた米山さんの娘の方がいばっていてけんかではかなわないらしいです。下の娘はおばさんの瑞枝ちゃんに似て色白でかわいい子です。

枝画ちゃんの方は二人とも女の子で四年と一年、今のところおとなしくしています。この他、次の人たちの子供が入っています。井口

康子(37年)伊藤美和子(34年)矢萩里乃(26年)長沢ピン子(32年)森下城(32年)北島美帆子(41年)それに高校卒の李礼子、穴山恵子、神山茂子さんなどです。転入学も受け入れて

いますから、今からでも入られて下さい。村島先生の遺言で、入学試験の点数は十パーセントはおまけする

### 2. 結婚相談所開設

昭和三十年頃全校同窓会へのメッセージ(テープ現存)で村島先生が提唱していらした結婚相談を始めていと思います。お嫁さん、お婿さんの欲しい人は申し

込んで下さい。今あるのを紹介しますと

A、お婿さん求む  
当方24才身長156センチ性格単純明快くせなし積極性あり、美人。希望25才以上30才未満身長170〜180センチ肥満若ハゲお断わり職業医者弁護士等偉そうなのはだめチヂババぬき、誠実温和な人求む。

B、お婿さん求む  
当方22才新卒、明朗活潑気はやさしくて力持ち美人。希望30才まで165センチ以上職業不問定職あればよし、母親から自立している人。収入中の上くらい性格堅実なれどもユーモアのある人。

その他いろいろあり、問合わせは返信用封筒に切手貼付のこと。  
再婚希望の方もごえんりよなく、リサイクルの中に思われぬ掘出し者があります。



横山哲夫

「シルクロード」の福島光夫といっても、知っている方は少ないでしょうね。昭和二十五六年頃、小学校にいた先生です。その後彼は高校に移り更に家業の關係で、東京渋谷の中央理容学校の先生になり、今は偉くなっています。建築物の絵が得意で、この九月下旬、藤沢の画廊で個展をやりました。

今年の原稿は、大石君の「水」をはじめ、乾君、藤岡君とも、職業意識丸出しという感じ、これはコマーション料がとれそうです。いっそ来年からはページをふやして、広告料をとることにするか、そして私は今年退職後編集局に居すわって、でもそんなには儲からないだろうな。ともかく原稿を書いて下さった皆さんごくろうさんでした。未提出者は留年ですよ。